

今日私がいちばん心をつかまれるのは、20節の言葉です。

「二人はすぐに網を捨てて従った。」

シモンとアンデレ。漁師として生きていた二人が、イエスさまに呼ばれて、すぐに網を捨てて従いました。なぜ彼らはそんなことができたのでしょうか。

この「すぐに」という言葉を読んで私は思います。これは単なる「従順」ではない。「感動したから」でもない。これはもっと深いこと——解放です。

## 1. 従う前に、彼らは解放された

イエスさまは言われました。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」

この言葉は命令のようにも聞こえます。けれど、福音書が語るイエスさまの言葉は、人を縛る命令ではありません。人を自由にする呼びかけです。

私たちは縛られている時には決断できません。「変わりたい」と思っても変われない。「やめたい」と思ってもやめられない。怖いからです。生活が不安だからです。

そして何より、「自分はこういう人間だ」と思い込んでいるからです。

しかしイエスさまの声は、人を押さえつける声ではありません。「あなたは、ここから始めてよい。」「あなたは、別の道を歩いてよい。」「あなたは、生きてよい。」そのような声です。

だから二人は、すぐに動けました。恐れより希望が勝った。網よりも、主の言葉が心に響いたのです。従う者たちは、まず解放された者なのです。

## 2. 網とは何でしょうか

聖書はこう言います。「網を捨てて従った。」

網は魚を捕まえる道具です。自由に泳ぐ魚を絡め取り、そこから逃げられなくなる。捉えられた命は、誰かの財産になります。

けれど、網が縛るのは魚だけでしょうか。網はそれを持つ漁師自身も、しっかりと根本で縛り付けてしまいます。

網がなければ収入がない。網がなければ家族を養えない。網がなければ明日が不安になる。

つまり網とは、「魚を捕る道具」であり、同時に、自分の人生を縛りつける仕組みです。網は人を縛り、心を縛り、「これなしでは生きられない」と思わせます。

## 3. ガリラヤから始まった光

今日の福音書には、もう一つ重要な言葉があります。「異邦人のガリラヤ」。

そこは中心ではない場所。境界の場所。混ざり合う場所であり、中心から軽んじられやすい場所です。けれど神の光は、まずそこから差し始めました。

神は、整った場所から救いを始めたのではありません。「理想的な人」から始めたのでもない。「正しい人」だけを選んだのでもありません。

神は暗さを抱える場所へ先に来られました。傷を抱える場所に、イエスさまは光として来られました。

だから私たちは確信できます。あなたの人生が、どこか混ざり合っていてもいい。弱さがあってもいい。失敗があってもいい。言葉にできない痛みがあってもいい。神の光は、そういう場所にこそ来るのです。

#### 4. 現代社会の網——学び、働き、評価

現代にも、網はたくさんあります。学び、成績、資格、評価。

働き方、役割、世間体、土地、財産。

本来、学びも働きも祝福です。働きは生きるために必要です。学びは人を育てるものです。けれどその祝福が、網に変わる時があります。

それは、学びや働きが人を数字にし、人を部品にし、人を道具のように扱うようになった時です。

「休んではいけない。」「弱音を吐いてはいけない。」「遅れたら終わりだ。」そんな声に追い立てられる時、私たちは自由ではなくなります。

そして気づかぬうちに、人が人でいられなくなる。これが網の働きです。

#### 5. もう一つの網——インターネット

そして、今日ぜひ語りたい網がもう一つあります。それはインターネットです。インターネットは便利です。疑問を入れると、すぐ答えが返ってきます。学ぶこともできる。助けになることもあります。

しかし同時に、インターネットは私たちの心を絡め取る網にもなります。

高校生のみなさんに、たとえばこういうことがあります。夜、寝ようと思ってスマホを置いたのに通知が来る。気になって開いてしまう。一つ見たら、また次。気づけば夜更かしになる。

「切り抜き動画」が流れています。ほんの数秒で、誰かを悪者にする動画です。全部を知らないのに、短い言葉だけで心が動かされてしまう。

「炎上」が起こると、必ず強い言葉が勝ちます。冷静な言葉は、流されて消えてしまいます。

そして最近は、私たちが見たものに合わせて次々におすすめが出てきます。情報のアルゴリズムという網です。AIが考えているように見えても、実際は「あなたが反応したものを、さらに見せる」仕組みです。

だから、怒りが強ければ強いほど、もっと怒りたくなる情報が出て来ます。不安が強ければ強いほど、もっと不安になる情報が出て来ます。

これは網です。見なくていいのに見てしまう。閉じたいのに閉じられない。苦しいのにやめられない。そこに自由はありません。

そしてこれは高齢の方にとっても同じです。ある日突然スマホに「あなたの銀行口座が危険です」「すぐに手続きをしてください」と届く。詐欺が普通に生活に押し入ってくる時代です。

また健康の情報もあります。「これを食べれば治ります」「この薬は危険です」「この病気はもう手遅れです」。そういう言葉が次々に流れています。

不安な時ほど、人は検索します。すると、もっと怖い情報が出てきます。そして夜眠れなくなり、心が休まなくなる。

だから私たちは、ネットに“使われる人”ではなく、ネットを“道具として使える自由な人”でありたいと思います。

そしてもう一つ大事です。神は人間の価値を、人からの評価「いいね」で決めません。あなたの価値は数字で決まりません。反応で決まりません。評価で決まりません。あなたの価値は、神があなたを愛している、という事実によって決まっています。

## 6. 「人間をとる漁師」とは支配ではなく救い

ここでイエスさまの言葉に戻りましょう。「人間をとる漁師にしよう。」

「とる」という言葉は捕まえるように聞こえるかもしれません。けれどイエスさまがなさったことは支配ではありません。捕獲でもありません。

縛られた人をほどく。追い出された人を迎え入れる。倒れた人を起こす。弱い人に触れて、癒し、回復させる。

そう考えると「人間をとる」とは、人を所有することでも支配することでもない。沈んでいく人を引き上げる働きです。

絶望の中にいる人を引き上げる。呼吸ができない人に息を取り戻させる。自分を責め続ける人に「あなたは大丈夫だ」と語りかける。それがイエスさまの漁です。

## 7. 弟子が捨てたのは、道具ではなく「奪う生き方」

弟子たちは網を捨てました。生活の基盤を捨てました。財産を捨てました。それは単に勇気があったからでしょうか。私はそうは思いません。

彼らはイエスさまの呼びかけの中で、もう一つの人生が開かれたのです。網によって命を奪う生き方から、命を生かす生き方へ。

人を捕まえて自分のものにする人生から、人を助け、自由にする人生へ。弟子が捨てたのは道具ではありません。奪う生き方です。

そしてその代わりに手渡されたのは、生かす働きです。

## 8. 結び: 主は癒し、福音を告げ、あなたを自由にする

今日の最後、23節にはこうあります。

イエスはガリラヤ中を巡り、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民のあらゆる病気、あらゆる患いを癒された。

イエスさまは「従え」と言って終わりではありません。主は巡られます。会いに来られます。教えられます。福音を告げられます。そして癒されます。

つまり主の働きは、人を縛ることではなく、人を生かすことです。心が疲れ切っている人に休みを与える。恐れで縮こまっている人に息をさせる。

憎しみの網に絡まった人をほどく。不安の渦から抜け出せない人を、光へ引き上げる。そのように主は、今日も私たちを解放してくださいます。

みなさん。私たちの周りには多くの網があります。「これがないと生きられない」と思わせる網。「こうでないと価値がない」と思わせる網。

「もっと怒れ」「もっと憎め」と煽る網。「比べろ」「追いつけ」と追い立てる網。けれど主は言われます。「わたしについて来なさい。」

それは命令ではなく、解放の呼びかけです。あなたは縛られたままで生きなくてよい。あなたは奪い合いの仕組みに閉じ込められたままで生きなくてよい。

あなたはインターネットの波に飲まれたままで、憎しみや不安の世界を生きなくてよい。主はあなたの網をほどきます。あなたの心の絡まりをほどきます。

そしてあなたを、命を生かす道へ招かれます。今日、私たちは癒され、解放された者として歩き出します。誰かを縛るためではなく、誰かを生かすために。

主が、罪人である私たちと共にいてくださいます。主の福音は、情報よりも深いところで私たちを支えます。

「あなたは愛されている」という真理は、どんなニュースよりも確かです。イエスさまに従って、私たちも歩み出しましょう。

### \* この文章を読んでくださったあなたへ

もし今、あなたの心が疲れているなら、どうか一人で抱え込まないでください。

主は、疲れ切っている人に休みを与え、恐れで縮こまっている人に息をさせ、沈んでいく人を引き上げてくださいます。

### \* 今日の「小さな一歩」

- ① 夜、スマホを置く時間を、まず 5 分だけ早めてみる。
- ② 不安な検索を続けたくなったら、深呼吸して「私は愛されている」と心の中でつぶやく。
- ③ 誰かと比べたくなったら、今日ひとつ感謝できることを思い出す。

### \* 覚えていてほしい言葉

「あなたは愛されている。」

この真理は、どんなニュースよりも確かです。

### \* 礼拝へどうぞ

教会は、悩みを抱えた人が安心して休める場所でありたいと願っています。

どなたでも歓迎します。お気軽にお越しください。